

高岡市吉久における住民協働型サイン計画 その2

—案内スポット、モデルルート、サイン配置、サイン表記計画—

重伝建 まちづくり サインデザイン
住民参加 地域愛着 エピソード

正会員 ○北島 陽貴*
準会員 梶田 美結**
正会員 重山 隼人*
正会員 藪谷 祐介***
会員外 田邊 元***

1. 研究の背景と目的

富山県高岡市吉久(以下、吉久)を対象とした吉久サイン計画は、専門家として富山大学藪谷・田邊研究室(以下、富山大学)が主導しつつ、地域住民を対象とした吉久の魅力に関するアンケート調査(以下、アンケート調査)や、有志の地域住民と協働で取り組んだ案内スポット^{注1}の選定とモデルルートの考案、それらに基づいたサイン配置・表記計画(以下、チーム活動)、地域住民との意見交換を行う報告会といった地域住民との様々な協働によって取り組まれてきた。本研究では、このように専門家が主導しつつ地域住民との様々な協働を通して取り組むサイン計画を住民協働型サイン計画と呼ぶ。

前稿では、アンケート調査や既存サイン調査といった事前調査と、そこで得られた知見をもとに立てた本計画の方針を報告した。本稿では、それに基づいて取り組んだチーム活動と、それを通して得られた住民協働型サイン計画の効果や課題の検討を行う。

2. 研究方法

アンケート調査を用いて、地域住民の中から参加希望者を募集した結果、4名の有志メンバー^{注2}が集まり、吉久まちづくり推進協議会メンバー^{注3}(以下、協議会メンバー)の4名、富山大学メンバー5名^{注4}と合わせて計13名のメンバーで構成されるサインチームを発足した。また、チーム発足前に参加希望者を対象に本計画の説明会を行い、最終的な参加意向を確認した。その後、サインに関する簡単なレクチャーとサインに着目したまち歩きを行うことで、参加者に本計画に対する理解を深めてもらった。なお、チーム活動は基本的に隔週で行い、富山大学がチームメンバーの意見をまとめる形で取り組んだ。また、月1回の吉久まちづくり推進協議会役員会でチーム活動の進捗状況を報告し、サインチーム以外の地域住民との意見交換も行った。

3. 計画結果

本計画の結果を図2・3で示す。図2は案内スポット、モデルルート、サインの配置計画を示している。また、

図3はサインの表記計画のうち構成要素の計画を示している。

3-1. 案内スポットの選定・モデルルートの考案

サインに掲載する案内スポットの選定は、①チームメンバーとの本計画の目標の共有・意見交換、②アンケート調査で集まった魅力エピソードをもとにした案内スポットの候補を追加・再分類、③②をもとにした吉久を巡るモデルルートの考案、④②③をもとにした案内スポットの候補の取捨選択、という4つの手順で行った。

①目標の共有・意見交換では、事前調査の結果をもとに立てた方針を提案しつつ、計画するサインを通してどんな体験を得られると良いかを考えてもらい、意見交換を行った。ここでは、有志メンバーからの意見が多く集まった。主な意見は、地域住民が吉久の魅力・価値を認知し、関心向上に繋げることや子どもも楽しめること、写真映えすること、季節の情景や行事の様子を思い出せることなどである。それらの意見から、「来訪者だけでなく、地域住民も楽しめるサインを計画する」という本計画の目標を立てることができた。また、有志メンバーは、サインによって情報を得られるようになることを自分事として捉えながら本計画に参加しており、そのようなチームメンバーは地域住民も楽しめるサインを計画するうえで、重要な存在であると考えられる。

②案内するスポットの候補の追加・再分類では、協議会メンバーからの意見が多く集まった。主な意見は、インフォメーションや駐車場などの来訪者に必要不可欠なスポットや、歴史のあるスポットに関するものであった。本計画の協議会メンバーの中には、元々まち歩きガイドを始めとするまちづくり活動に取り組んでいる吉久の歴史や動向に詳しい住民もいた。このような地域に精通しているチームメンバーは、サイン計画の情報の精度を高めるうえで重要な存在であると考えられる。

さらに、上記のようなチームメンバーの目標と案内するスポットの候補に関する意見をもとに、アンケート調査結果に案内するスポットの候補を追加しつつ、アンケート調査結果に基づいた魅力スポットの分類を見直した。

その結果、案内スポットの候補を【快適来訪スポット】、【歴史スポット】、【写真スポット】、【憩いスポット】、【行事スポット】、【子どもスポット】の6種類に分類した(図2)。再分類前は場所による分類であったのに対し、再分類後はエピソードの内容による分類としたことで、案内スポットのテーマを明確化することができた。

③案内するスポットの候補を巡るモデルルートの考案では、事前にチームメンバーにモデルルートと合わせて、そのルートのまち歩きでの体験やルート名を考えてもらい、それを持ち寄って意見交換を行った。協議会メンバーからは、歴史スポットを中心に巡るルートや来訪手段を想定した具体的な意見が集まり、有志メンバーからは多様な体験を想定した意見が集まった。また、モデルルートの考案の中で新たな案内スポットの候補も生まれた。このように、協議会メンバーと有志メンバーの異なる視点によって多様な意見が集まり、モデルルートに関する意見交換においても様々な視点を持つチームメンバーと専門家が協働して取り組むことに意義があると考えられる。その後、富山大学がそれらの断片的な意見を整理し、類似するテーマのルートの統合や特殊なルートの削除を行った。その結果、重伝建エリアを中心とする【歴史ルート】、【自然ルート】、【跡地・御利益ルート】という3つのモデルルートに整理できた。【歴史ルート】と他の2ルートが重なることで、来訪者の主な目的である重伝建エリアを巡る歴史ルートを中心に、その周辺に広がる他の案内スポットへの興味関心を高めることを意図して

いる。加えて、中心軸となる歴史ルート以外のルートは環状とすることで、地域住民の日常的な散歩ルートを提案することも意図している。このように整理したモデルルートを、チームメンバーに確認してもらった上で、モデルルート上にないスポットや地域固有性が低いスポットは案内の重要度が低いと判断し、削除した。

ところで、チーム活動では、当初はまちづくり活動における協議会メンバーと有志メンバーが混在する2つのグループに分かれて議論を行ったが、積極的に発言する協議会メンバーに対して有志メンバーが委縮してしまう場面が多々見られた。吉久への知識量の差が主な要因であると考え、両メンバーを分けて2つのグループをつくったところ問題が改善され、それぞれ特有の視点での意見が多く集まり、有益な活動成果を得ることができるようになった(図1)。ただ、議論を膨らませる段階から議論を収束させる段階になると、2グループに分かれた状態では全体で情報を共有しにくいいため、2グループを統合して議論を行った。そのような状況では、再び両メンバーの間で発言力に差が生じることとなった。

3-2. サインの配置計画・表記計画

サインの配置計画や表記構成は専門的な知識を必要とすることから、富山大学が計画案を作成し、それをチームメンバーが確認する方針で進めた。

サインの配置計画を図2に示す。吉久の街路は複雑であり、案内スポットが広範囲に分布している。そのため、モデルルートを誘導サイン^{注5}で示すためには非常に多くのサインの設置が必要となり、現実的ではない。そこで、本計画では誘導サインは快適来訪スポットのみに限定し、案内サイン^{注6}や位置サイン^{注7}で全ての案内スポットを示す計画とした。なお、モデルルートは案内サインにおける表記とパンフレットやオンラインにおける公開によって情報を発信する計画とした。

続いて、サインの表記計画におけるうち構成要素の計画に取り組んだ(図3)。先述した6種類の案内スポットのうち、快適来訪スポットを除いた5種類をロゴマークで示しつつ、モデルルートや関連する情報にはQRコードを読み取ることでアクセスできるよう工夫した。

さらに、サインの表記計画のうち案内スポットの紹介内容の計画に取り組んだ。前稿で報告したアンケート調査結果から得られた魅力エピソードと文献情報に基づいて富山大学が作成した計画案を、チームメンバーが確認する方針で進めた。吉久の歴史情報に詳しい協議会メンバーからの指摘がほとんどであったことから、チーム活動以外では一部の協議会メンバーに確認を依頼し、指摘と修正を何度も繰り返しながら情報の精査を行った。紹介文には案内スポットの情報を示すだけでなく、前稿で報告したアンケート調査から得られた地域住民のエピソードを取り入れることで、重伝建でありながら地域住民の生活の場となっており、様々な魅力が存在する吉久らしさを感じられるサイン計画とすることができた。

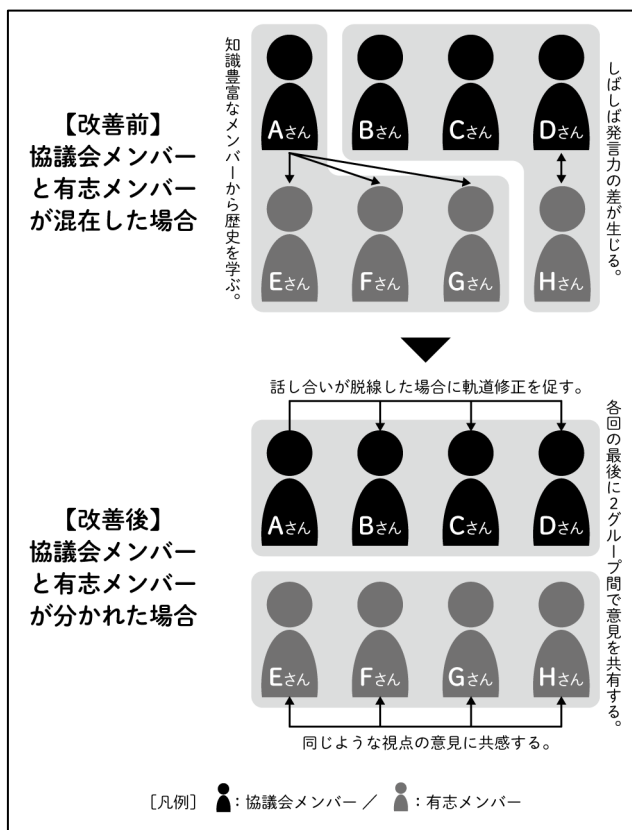


図1 チーム活動のグループ分け

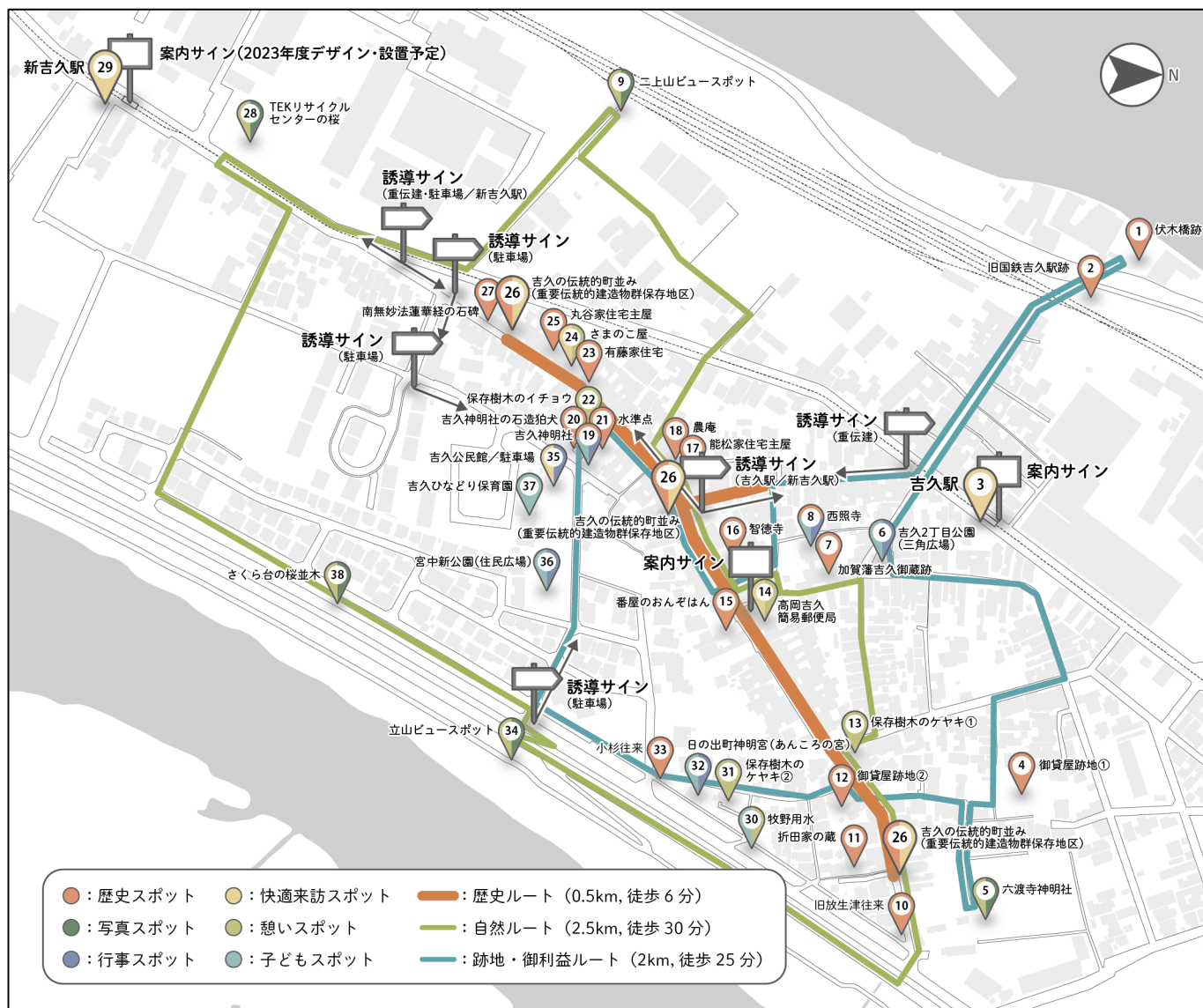


図2 案内スポット・モデルルート・サイン配置計画

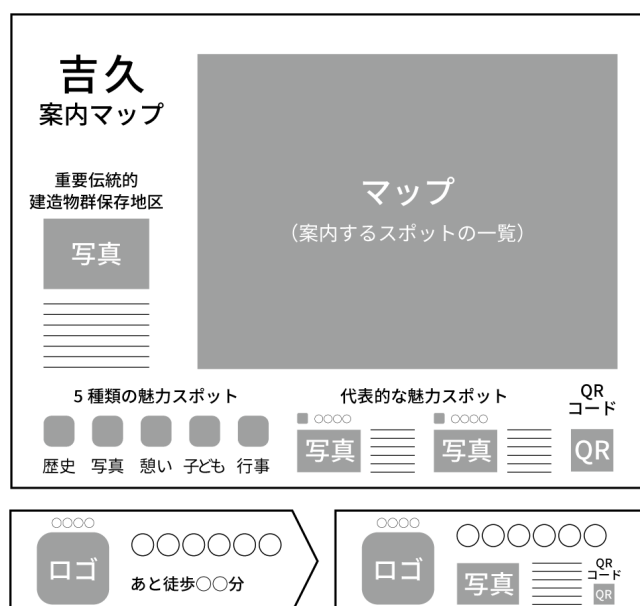


図3 サインの表記計画(構成要素)

4. 地域住民に対する報告会と冊子

本計画の結果を報告会で地域住民に対して報告し、質疑応答とアンケート調査によって地域住民からの意見を集めた。また、報告では、報告会の参加者にまちづくり活動への参加に興味関心を持ってもらうことを意図して、有志メンバーに感想を発表してもらう機会を設けた。

その結果、有志メンバーは活動の中でこれまで知らなかった吉久の歴史情報や魅力を発見したことで、吉久への愛着の向上や、本計画への継続参加の希望に繋がっており、まちづくり意識が高まっていることが分かった。今後、計画したサインの設置によって、より多くの地域住民の目に触れ、その効果が広がると考えられる。また、参加動機は仕事の閑散期による時間的な余裕や、富山大学の学生への協力、家族の参加がきっかけなどであった。加えて、報告会への参加者は30人程度と少なかったことから、時間的余裕のある地域住民や活動への共感性の高い地域住民をターゲットとして募集をしたり、家族ぐ

るみで参加しやすいように募集の仕方を工夫したりすることが、参加希望者の増加に繋がる可能性があると考えられる。さらに、報告会に地域外から訪れた方々の感想の中には、本計画によって吉久に対する親しみやすさが生まれることを期待する声があったため、サインを計画・設置することは来訪者に対して寛容な地域の雰囲気づくりに効果があると考えられる。

その後、報告会で集まった上記のような意見を取り入れつつ、吉久の全住戸に配布する冊子の制作に取り組んだ(図4)。冊子は計6ページで、本計画の背景・活動内容・計画結果の流れが分かりやすいよう構成した。また、より多くの地域住民に興味関心を持ってもらうために、本計画で設置されるサインによる魅力的な体験をキャッチーなイラストで描いた表紙や親しみやすいフォントの見出し、全体の文字量の抑制などの工夫を行った。

その結果、冊子を見た地域住民から、来訪者に対する現状に関する調査不足の指摘を受けた。冊子を配布したことで地域住民からの意見を得る機会が生まれており、冊子制作の成果であると言える。また、指摘された事前調査不足は、準備や活動に時間を要する協働を1年間の時間的制約の中で行ったことで生じた課題であると考えられる。よって、住民協働型サイン計画では、時間と活動内容のバランスを検討することが重要であると考えられる。

5. まとめ・課題と展望

本研究では、住民協働型サイン計画の効果と課題を検討し報告した。

効果としては、前稿で報告したアンケート調査で集めた地域住民のエピソードをサインの表記計画に取り入れることができた点があげられる。また、地域に詳しいメンバーとそうでないメンバーが混在したチーム体制の効果として、様々な視点からの意見交換ができることによって、専門家だけでは得られない活動成果を得ることができた。また、本計画は有志メンバーにとって地域に対する学びを得る機会となっており、地域愛着やまちづくり意識の向上に繋がっていることも効果の1つである。そのような地域住民は、今後のまちづくり活動の新たな担い手となっていく可能性があると考えられる。

その一方で、課題としては、アンケート調査の回収数や報告会への参加者が少なかった点があげられる。サインという聞き馴染みのない用語に対して、地域住民の興味関心を高めるための工夫や募集の仕方の工夫が必要である。また、地域への知識量がチーム活動でのメンバー間の発言機会の差に繋がっている点も課題の1つである。発言機会のバランスをとりメンバーの満足度を高めることは、メンバーの今後のまちづくり意識にも関わるため、計画を主導する専門家側の重要な役割である。



図4 地域住民に配布した冊子

このように、住民協働型サイン計画において、地域住民が参加しやすく、気持ちよく活動できる環境をつくることは、専門家だけでは不十分な情報や意見をサイン計画に活かすことや、参加した地域住民の地域愛着やまちづくり意識を高めるうえで重要であると考えられる。

注

- 注1)「案内スポット」とは、計画するサインを用いて来訪者や地域住民を案内するスポットのこと。
- 注2)「有志メンバー」はこれまで積極的に地域活動に参加して来なかった人が多く、家族で参加したメンバーもいた。また、他にも2名の応募があったが、チーム発足時に都合が合わず不参加となった。
- 注3)「吉久まちづくり推進協議会」は、2011年に「吉久の伝統的町並みを考える会」と連合自治会が一体となったものが設立され、まちづくりワークショップの開催など住民主体のまちづくりに取り組んでいる。本計画には、会長を始めとする5名のメンバーが参加した。
- 注4)「富山大学メンバー」は3名の学生とその補佐である2名の教員で構成されている。
- 注5)「誘導サイン」は、出発地と目的地の間に配置されるサインで、特に分岐地点に配置される。現在地から目的地までの距離や方向を示すサインである。
- 注6)「案内サイン」は、出発地に配置され、現在地と目的地の位置関係や様々な情報を示すサインである。
- 注7)「位置サイン」は、目的地に配置され、目的地に関する情報を示すサインである。

*富山大学芸術文化学部 学部生

**富山大学人文社会芸術総合研究科 大学院生

***富山大学学術研究部芸術文化学系 講師

*Student, Graduate School of Art and Design, University of Toyama

**Graduate School of Humanities and Social Sciences, University of Toyama

***Lecturer, Faculty of Art and Design, University of Toyama